
平成31年度 第3回

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

平成31年2月3日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生^{くしけんせい}どうしの貸し借り^{かひかり}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は20ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

□ ① 次の——線部のカタカナは漢字に直して書き、漢字はその読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 雨のため花火大会はジュンエンになった。
- ② カンマツにある年表を利用する。
- ③ ケイソウで出かけて寒い思いをした。
- ④ 有名な絵をモシヤした作品。
- ⑤ 宿題のイチラン表を確認する。
- ⑥ 川のケンリュウをめざして歩く。
- ⑦ 主将がネツベンをふるって選手を上げました。
- ⑧ ケンアクな空気がただよう。
- ⑨ さすがに連続優勝は至難の業わざだろう。
- ⑩ これからは犬の世話を弟に任せる。

□ 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

(注1) 概して日本人はプレゼンが下手である。自らの発見でも、新しい発展でも、興奮することなく淡々と述べる。その淡々とした語り口に、研究者としての良心、誠実さが表れるのであって、自らの成果をおもしろく見せようなどとするのは学者としての(注2)矜持に欠けると思っている研究者は多いはずである。

私も以前はそのように感じていたし、殊更にぶつきらぼうな①もそっけないスライドを作り、結果としての細胞の写真や、生化学的な数値だけを示して発表を終わっていた。それが恰好いい発表だと思っていた。

しかし、②これはある意味ではきわめて(注3)不遜な態度でもあることは、少し考えてみればわかることであろう。そもそもこのような成果発表の意味は、自分のデータについているんな人から批判やコメント、(注4)示唆を得たいがために行うのである。聞く人がその背景を知り、興味を持ってくれることが前提のプレゼンなのであるから、そのための準備を怠っては何のための発表なのかわからない。

読者は、あるいは聴衆は、自分と同じレベルであるはずだという思い込み、あるいはそうあるべきだという上からの目線。どちらをとつても、自らの発表を「聞いていただく」という謙虚さからは遠いところにある。聞きたい奴だけ聞けばいいのであって、無理にみんなに聞いてもらおう積もりも、そんな必要もないという傲慢さが透けて見える。

国際学会に多く招待されるようになって、外国の学者の発表に接するうちに、徐々に③そんな研究発表に対する私の考え方が変わらざるを得なくなっていた。外国の学者の発表は、どれも研究の背景を説明するための導入、(注5)イントロのスライドが充実し、まず自分の研究の位置づけを明確にしてから、新しく得たデータに関する説明に移っていく。その説明がまたとても懇切丁寧で、専門分野の人でなくとも容易に理解できるような図になっているものが多い。

わが国の古いタイプの学者には、こんなにも懇切丁寧な素人にもわかるような図の構成は、ひよつとしたら聴衆へ媚びていると映るかもしれない。しかし、考えてみると世界では、日本のような単民族国家はきわめて稀なのであって、多くは多民族が雑居し

ているという国である。いきおい、何も言わなくともわかってくれるはずだという前提は通用しないことになる。

当然のことながら、いかに日本人であっても、私とあなたは違ちがっていて当然と思っちがてはいるだろう。しかし、発想の根本のところで、私が当然のこととして理解していること、知しっていることは、あなたも同じ程度には知しっているはずだという、一方的な了解りようが、あるいは思い込みがあることも事実である。こんなことは改めて言わずとも、当然わかわってくれているはずだという思い込みである。

【④】という言葉は、そんな日本人の心性の一端いったんを（注6）端的たんでまに表あらわしているだろう。こちらが思おもっていることは、言葉に出いさずともおのずから相手はわかわってくれるはずだというわけである。

しかし、多民族からなる国家の場合には、こうはいかない。基本的な（注7）スタンスは、私とあなたは、立たっている場所がもともとまったく違うのだということからすべては始まる。私の考かんえていることは、あなたは理解りかいしていないはずだという前提からすべては始はまると言いってよい。そこには端的に言葉が違ちがうことからくる理解の不十分さということも当然あるだろうが、より本質的なところは、それぞれが持つ文化の違ちがい、文化が歴史という時間のなかで醸かし出だしてきた香かりの違ちがいに（注8）起因きんすると言いってもよいだろう。

だから外国人が説明するときには、あなたは私について何も知らないはずだということから、説明は始まる。懇切丁寧に、わかりやすくせざるを得ないのである。

それは聴衆の側からも真であり、本来違ちがっているのであるから、理解できなくともそれは私の責任ではない、という認識から議論は始まる。だからわからないことは、どんな些さ細さいなことであっても、それを質問するということが、話わをしている人の心証を害するとはまったく考えられていない。⑤自分が理解できないのは、相手に不備があると言いわんばかりの質問に（注9）閉口へいこうすることも、多く経験せざるをえないわけである。

しかし、わからないことはとことん尋たずねて、そのずれを修正するという態度は、わからないことは自分に非があることだから、たとえわからなくとも相手の発表を尊重してお聞きする、すべてを受け入れるといったへりくだりの態度とはあきらかに違ちがうもの

である。そして、どちらがその発表から得るものが多いかと考えれば、一も二もなく、質問をして認識、感覚、蓄積された知識の量の差を詰めておくことに意味があるの言うまでもないことだろう。

人の成果発表を聞くとき、それを自分の仕事として考えることができなければ、成果発表会などという会そのものが無意味である。自分ならこう考える、こうやってみると、自分の仕事として考えることが必須である。人の発表をただ聞いているだけでは何の意味もない。

研究者は誰でも、自分の仕事（研究）はおもしろいし、大きな意味を持っていると思っっている。自分はおもしろい研究をしているという自信があるから、こんなある意味たいへんな職業に就いていられるのだとも言えよう。研究はハードであり、研究者はハードワーカーである。

自分の研究をおもしろいと思えなければ、研究者としてはやっつけていけないが、自分の研究だけしかおもしろがれなければ、これもまた研究者としてやっつけていくことはむずかしいと私は思っている。研究者としての適性に欠けると思うのである。

私は、自分の研究をおもしろいと思えるのと同じ程度に、他人の研究をおもしろいと思えるかどうか、研究者に向いているか否かの判断の基準であると思っっている。いくらいいデータを出す人であっても、他人のデータを自分の仕事と同じだけの熱量をもつておもしろがれなければ、研究者としてはつきり不向きであると思わざるを得ない。学者としては失格であろう。

これがもっとも端的にあらわれるのが、研究発表の際に見られる質問の量である。発表者のデータを自分のものとして考えようとするれば、いきおい、さまざま（注10） デイテールに関して知ろうとするのは必然である。発表のなかにある曖昧な部分について問いたださなければ、自分のデータとして考えを巡らすことは不可能であるし、発表者による結論付けについても、自分ならこう考えるという、異なった解釈も当然出てこよう。

勉強をするために、発表される内容をひたすら聞くという姿勢に徹するのならば、質問などせずひたすらメモを取って、情報を収集すればいいかもしれない。しかし、発表された内容を、当事者として自分ならこういうアイデアで実験をし、結果をこう解釈することもできる、明確な結論を得るためにはこの部分に不備があり、次にはこんな実験を計画すれば、もっとはつきりした結

論に到達することができないのではないか、など、考え始めれば、おのずから尋ねたいことは次から次へ出てくるはずなのである。

私はこれを「能動的に聞く」と言っている。人の話は、能動的に聞いてこそ、自らの身につくものである。⑥話された内容をただひたすら覚えようとしたり、吸収しようとしているだけでは、却ってその知識は自分のものとならない。

「能動的に聞く」とは、話された内容を、自らのこれまでの知の体系のなかに位置づけることであり、位置づけるためには、聞きつつ常に自分の知の体系を確認し、照合する作業を伴うはずである。外部から（注11）インプットされてくる内容と、既存の自らの知識の箱とのあいだに（注12）軋轢が生じるのは当然であり、その軋轢こそが質問を促す力になる筈なのだ。

質問は発表者自身に示唆を与えるだけでなく、それは発表された新知見を、自分のなかに組み込んで、知識の展開を図り、新しい知の体系を獲得する作業である。

私たちが研究室内で、このような研究発表の場を多く持つのは、発表された内容を自分のものとして考える、自分ならどう考え、どう行動するか、そのような考えかたの訓練のためにこそ、他人の発表を聞く意味があるのである。そんな場で、質問が出ないとしたら何の意味もない。

私の（注13）ラボでは、質問が出ないのは何も聞いていないのと同じだと言い続けてきた。おかげで学会などでもラボのメンバーはよく質問しており、私はニンマリする。

（永田和宏『知の体力』より）

- (注1) 概して—— だいたいのところ。
- (注2) 矜持—— 自分の力・才能などを信じて持つ誇り。プライド。
- (注3) 不遜な—— 思いついて相手を見下すさま。
- (注4) 示唆—— それとなく示すこと。ヒント。手がかり。
- (注5) イン트로—— 「イントロダクション」の略。論文の序論。
- (注6) 端的—— わかりやすく、はっきりしているようす。
- (注7) スタンス—— 物事に対する立場や態度。
- (注8) 起因する—— ある事が原因となって何かが起こること。
- (注9) 閉口する—— 手におえなくて困ること。
- (注10) デイテール—— 細目。こまかいところ。
- (注11) インプット—— 外部にあるものを内部に取りこむこと。
- (注12) 軋轢—— 争いがあったがいかどが立つこと。
- (注13) ラボ—— 研究室。実験室。

問1 ――部① もそつげもない」について、これが「つまらない」という意味の語句になるように、空らん に入れる漢字一文字として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 実
- イ. 心
- ウ. 味
- エ. 技

問2 ――部② 「これはある意味ではきわめて不遜な態度でもある」とありますが、なぜですか。本文から十五字の語句をぬき出して次の文の空らんを補い、その理由説明を完成させなさい。ただし、句読点や記号も字数にふくめます。

筆者が恰好いと思っていた発表には

が欠けているから。

問3 ——線部③「そんな研究発表に対する私の考え方が変わらざるを得なくなっていくた」とありますが、「考え方」が変わった

結果、どのようになりましたか。その説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 観察結果や実験データの数値を淡々と述べるようになった。
- イ. 研究の背景や研究の位置づけを明確にする導入を大事にするようになった。
- ウ. 聞く人に興味を持ってもらえることを大切に考えるようになった。
- エ. 専門分野の人でなくとも理解できるように丁寧な説明を行うようになった。

問4 文中の空らん【④】に入れるのに最も適切な四字熟語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。また、選んだ四字熟語を漢字に直して書きなさい。

- ア. タントウチヨクニユウ
- イ. ダイドウシヨウイ
- ウ. イクドウオン
- エ. イシンデンシン

問5 ——線部⑤ 「自分が理解できないのは、相手に不備があると云わんばかりの質問」とありますが、そのような質問をする人の考え方の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 発表者と聴衆^{ちようしゆう}とはそもそも立場がちがうので、聴衆に理解できないことがあったとしたら、それは発表者の責任だ、という考え方。

イ. 発表者と聴衆との間にある、それぞれの歴史が醸^かし出してきた文化のちがいは、どんなに多くの言葉を費やしても決して消し去ることはできない、という考え方。

ウ. わざわざ言葉に出さなくてもわかるはずのところを発表者がくどく説明するので、かえって聴衆には理解しにくくなった、という考え方。

エ. 発表者が聴衆からの質問の意味を理解しようとしなければなら、いつそのこと対立関係になってしまおう、という考え方。

問6 ——線部⑥ 「話された内容をただひたすら覚えようとしたり、吸収しようとしているだけでは、却^{かえ}ってその知識は自分のものとならない」とありますが、それはなぜですか。次の文の空らん^{らん}に言葉を補って理由説明を完成させなさい。ただし、三十字以上四十字以内とします。

自分のこととして発表を聞かないと、

。

三 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

主人公の「私」は、小学五年生の女の子の田中律である。同じクラスにいる塚本瀬里奈は、突然泣き出して、授業を中断させるなど、クラスで浮いた存在である。ある日、泣いて教室から走り出した瀬里奈を、律が追いかけたところ、瀬里奈は旧校舎の女子トイレの掃除用具入れに入っていた。彼女は「灰色の部屋にいる」と言う。

次の日、私は日直で、プリントを回収する役目だった。午前中から黒板に、プリントのことをちゃんと書いておいたのに、数えると一枚足りなかった。確認しなくてもわかった。塚本瀬里奈は、まだ私のところにプリントを持ってきていなかった。

私は塚本瀬里奈の机へ向かった。

「塚本さん。先週、算数の宿題出たでしょう。あれ、朝からずっと集めてるんだよ。黒板に書いてあるでしょ。塚本さんが最後だよ」

彼女は目を合わせないまま息を少し強く吸い込んで止め、机の中に手を差し込んだ。何の言葉も発せずに、机の中のものをゆつくりと一つずつ並べていく。教科書、ノート、リコーダー、下敷き、私は彼女の A 悠長な動作を苛々しながら見下ろしていた。

「ねえ、まだ見つからないの？」

塚本瀬里奈は黙ったまま身体をかがめて、机の中をのぞきこんだ。見つからないのか、今度は一冊一冊、教科書やノートを手にとつてめくり、間にプリントがはさまっていないか調べ始めた。

ようやく、国語のノートの隙間から折りたたまれたプリントを見つけ出すと、彼女はそれを差し出した。

私は何も言わずにプリントを引ったくり、机を離れた。振り向くと、彼女は今度は丁寧に一冊ずつ、机の上のものを中にしまっていた。

私が顔をしかめて乱暴にプリントをそろえていると、麗ちゃんが近づいてきて、私の肩を人差し指でつついた。

「ね、塚本瀬里奈、苛々するよねえ。どうしてあんなに、①」

私は低い声でいった。

「うん。私、あんな子大嫌い」

そう言うと、麗ちゃんは嬉しそうに笑った。

「やだあ、そんな大きな声で、律ちゃん、ひどい。でも、本当、そうだよね、私も、嫌いなんだあ。ふふ、あのね、久美ちゃんにしか言っただけで、好きな人の名前、律ちゃんにも教えてあげる。秘密だよ」

私よりよほど大きな声で言うと、麗ちゃんは耳元に口を近づけてきた。いっつも麗ちゃんと久美ちゃんを横目で見てきたのに、実際に自分が囁かれてみると、生ぬるい息がかかって気持ちが悪かった。

「ね、イニシャルだけ。でもわかっちゃったでしょ？わかっちゃった？」

「うん」

「誰にも言っちゃだめだよ、秘密だからね」

麗ちゃんは本当に秘密にする気があるのか疑わしいくらい甲高い声で何度もそう繰り返して、「絶対、協力してね」と、湿った両手で私の手を握った。

「わかった」

② ② そう返事をしながら私は目をそらした。この日を待っていたはずなのだ。でももう、そんなイニシャルなどどうでもよかった。

私はその日の授業中、ずっと塚本瀬里奈をもうあの灰色の部屋とやらに行かせない方法はないかと、考えをめぐらせていた。

その日は、ホームルームのとき、視聴覚室で、先生が映画のビデオを見せてくれた。

「はい、感想文を後で書いてもらおうからね」

皆は椅子を寄せ合って熱心にビデオに集中していた。その時、私は一人離れて椅子を置いて腰掛けていた塚本瀬里奈が、画面を見ないようにならずと顔を伏せているのを見つけた。

映画は明るいミュージカルで、目をそらすような内容ではなかった。私はふと、灰色の部屋のことを、「そんなの、つまんない」

と言ったときの塚本瀬里奈の不思議そうな顔が頭に浮かんだ。彼女は心の奥底では、本や映画の世界に比べると自分の「灰色の部屋」がどんなにみすぼらしいか気づいていて、無意識的に、鮮やかな映像や物語を避けているんじゃないかと、私は思った。何か、もっと、色とりどりの、美しい物語の存在を見せ付けてやれば、自分の閉じこもる灰色の部屋とやらが、どんなにみすぼらしくてくだらないものか、思い知らされ、もう、今までのように呑気にあの部屋へ行くことができなくなるかもしれない。

私はお昼休みに図書室へ行き、③よさそうな本をさがした。なるだけ挿絵がいっぱい入っているような、夢のような物語で、灰色の部屋と対照的なものを、と考えているうちに、ふと、用具入れの中に入っていく塚本瀬里奈の姿が頭に浮かび、④そうだ、「くみ割り人形」にしよう、と思いついた。

私は高学年向けの児童書のコーナーに行き、それを借りた。私が小さいころに読んだ絵本よりだいぶ長く、思っていたより複雑そうな内容に見えた。

私は放課後になると、「委員会があるから」と麗ちゃんと久美ちゃんに嘘をついて先に帰らせた。そして、席に座ったまま、塚本瀬里奈が席を立つのを待った。彼女はあいかわらず悠長な動作で、ロッカーから今日使った体操服をもってきて、わざわざ畳みなおして鞆の中にしまっていた。

やっと彼女が廊下に出ると、私も立ち上がり、教室を出た。

「塚本さん」

呼び止めると、彼女は足を止め、不思議そうに振り返った。

「……何、ですか……？」

「ねえ、今から、旧校舎に、一緒に行こう」

「私、もう帰りますから……」

「すぐ終わるから」

私はそう言うと、返事も聞かずに歩き出した。しばらくして、後ろから消え入りそうな足音がついてきた。

トイレの中に入ると私は言った。

「ねえ、このまえ、灰色の部屋の話、してたでしょ」

「……はい」

「私がつまんないって言ったたら、塚本さんはつまらなくないって言ってたよね」

向かい合うと塚本瀬里奈は私より頭一つ分以上も高かった。彼女は表情を浮かべずに私を見下ろしたまま頷いた。

「ね、塚本さんってひよっとして、あんまり映画とか、本とか見たことがないんじゃない」

塚本瀬里奈はなんで突然そんなことを言い出されたのかわからない様子で一瞬首をかしげ、それでもその指摘に頷いて答えた。

「やっぱりそう。だから、そんなものが、面白って思うんだ」

「……？」

「世の中には、もっと綺麗で楽しいものがいっぱいあるんだよ。灰色の部屋なんて、つまらないところに閉じこもってる人、塚本さんだけだよ。塚本さんは、まだ世の中をよく知らないんだ。私が教えてあげるよ」

そう言い、⑤ 私は鞆の中から本をとりだした。それを見て、今まで無表情だった塚本瀬里奈が急に顔をこわばらせ、後ろに一步下がった。

「……いいです、私、そんなの知らなくても、十分楽しいですから」

「遠慮しなくていいよ」

「私……」

塚本瀬里奈は必死に表紙から顔をそらしながら言った。

「私、本って、怖いんです……戻って来れなくなるから……。国語の教科書や、テストの問題文を読んだだけでも、なんだか、……自分が小学生の女の子でここは教室なんだってことを思い出すのに、すごく、すごく時間がかかってしまって……く、苦しいんです」

「塚本さん？何言ってるんだか、わかんないよ。いいからちよつとだけ読んでみなよ」

私は本を塚本瀬里奈に押し付けようとしたが、塚本瀬里奈は素早く身体を引き、トイレの奥へと走っていった。

「塚本さんっ」

塚本瀬里奈は急いで掃除用具入れを開くと、その中へ逃げ込んでしまった。私はドアを掴んで引こうとしたが、中から押さええているのかドアは開かなかった。

私は逃がすもんかと思った。どうしても、私は彼女をその部屋から引きずり出したかった。

あの部屋に行ってしまう前に引き止めなくては、と、私は急いで本を開き、開いた部分から大きな声で物語を朗読しはじめた。

「……やめて、やめて！」

私は彼女が耳を塞いでもその隙間から物語が入り込んでいくよう、声をはりあげた。トイレの中に私の声が反響した。

『「ああ、おじょうさま、どうぞこのはしごをおのぼりください。』クルミわりがいました。』

マリーはいわれるとおりのぼっていききました。ところが、袖のなかをのぼりきって、えりのところで顔を出したとたん、まばゆい光がさつとさしてきて、ふいにマリーはかぐわしい牧場に立っていました。無数の宝石がキラキラかがやいているように、光のあふれる、すばらしい牧場です」

ドアの中からは、物音がしなくなっていた。私はかまわず先を読み上げ続けた。マリーとくるみ割り人形は、氷砂糖の牧場を過ぎ、アーモンドと干しぶどうでできた門をくぐりぬけ、クッキーが大理石のようにしきつめられた道をどんどん進んでいった。

自分でも不思議なくらい喉が湿っていて、なめらかに声が出た。レモネードの川ぞいを歩き、ハチミツクッキーの村を過ぎ、キヤンデーの町をこえ、バラのみずうみを貝の乗りもので渡り、マジパンのお城にたどりつき……やがてもとの世界に戻ったマリーは、のろいの魔法がとけて美しい若者の姿になった青年と結ばれ、その国のお姫様になる……私には、それがマリーの空想なのか、本当のことなのか、よくわからなかった。読み終えた私の手から力がぬけ、本がすべりおちた。

それで、私は、魔法がとけたように引き戻されて、顔をあげて扉を見つめた。

中からは相変わらず、物音がしなかった。ドアに手をかけると、今度は簡単にそれは開いた。

中ではあの雨の日と同じように、塚本瀬里奈が細長い手足を折り曲げて、シンクの上に座り込んでいた。

「塚本さん」

肩を叩こうと手をのばすと、突然、塚本瀬里奈は顔をあげた。驚いていると塚本瀬里奈は顔をこちらへ向け、顔中の筋肉を使つてにっこりと笑ったので、私はたじろいだ。それは笑顔というよりは笑顔の標本のような感じで、私はちつとも笑いかけられていたような気がしなかった。

「……ねえ、ここにしばらくいていいかしら？だって、ここ、こんなにすばらしいんだもの。」

低い声で、呪文のように囁いたその言葉が、マリーの台詞の一つとまったく同じだったので、私は固まった。

彼女の表情もまるでいつもと違ってしまっていた。ドアの向こうから不思議な世界にたどりついたばかりというふうには、好奇心を露にした顔を突き出してトイレの中を見回すと、つま先を用心深くさしだし、シンクからこちらへ降り立った。

塚本瀬里奈は私が見えていないように目の前を通り過ぎ、トイレの個室を、用心深く丁寧に一つずつ覗き込んで、そのたびに笑い声をあげた。

全ての個室を確認し終わると、今度は蛇口に近づいていき、それを丁寧にくるくるとまわした。水が強く噴き出すと、また声をあげて笑った。

私は怖くなり、水音が響くトイレの中から走って逃げ出した。いつのまにか外は暗くなっていて、渡り廊下を越えて新校舎に戻つても、誰もいなかった。私は必死に階段を駆け下りて昇降口へ行き、上履きのまま学校の外へ飛び出した。

家へ帰ってからも、塚本瀬里奈の異様な様子が頭から離れなかった。砂だらけの上履きで玄関に駆けこんだ私をみて、母が不思議そうに言った。

「あら、どうしたの、今日、避難訓練だったかしら？」

「ああ……うん……」

B上の空で私はそう答えた。

「まあ、上履きの替え、洗ってあったかしら。まったく、そういうことはちゃんと早く言いなさいね」
母に返事もせず、私は二階へ駆けあがった。

私は部屋の中をうろうろしつづけた。あんなに「戻って来れなく」なってしまふなんて思わなかったのだ。

夜も目が冴えきつて寝付けず、寝不足のまま朝になった。

朝ごはんもそこそこに急いで登校した私は、塚本瀬里奈の下駄箱を確認したが、彼女の外靴はちやんとなくなって上履きが入っていたので、とりあえず一旦は家に帰ったのだとほっとした。

しかし、ひよっとしたらあの状態のままどこかへ行ってしまっただけなのではないかとまた不安が押し寄せてきて、そのまま下駄箱の前をうろつきながら、塚本瀬里奈が登校するのを待った。

校門のほうから、痩せこけた長身が黒髪をなびかせながら近づいてくるのを見つけ、私は胸をなでおろした。

「つ……塚本さん、おはよう」

その声をかけると、屈んで靴を脱いでいた塚本瀬里奈は身体をおこし、まっすぐに私の目を見据えると、大きい声で返事をした。

「おはよう、田中さん」

玄関にいたクラスメイト達の二、三人が驚いて、塚本瀬里奈のほうを見た。⑥私は塚本瀬里奈がまだ催眠術にかかっていることにぎよっとして、立ちすくんだ。塚本瀬里奈は私の驚いた顔に気にかける様子もなく、そのまま上履きを履くと校舎の階段を上がっていった。

(村田沙耶香『マウス』より)

問1 〓線部A「悠長な」、B「上の空で」の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「悠長な」

ア. 手際の悪い

イ. のんびりした

ウ. 自分勝手な

エ. 優雅な

B 「上の空で」

ア. 本当はよく知っているのに、知らないふりをして

イ. ありもしないものを実際にあるように、信じこんで

ウ. 思うようにいかなかったことで、がっかりして

エ. ほかのことに心が奪われて、目の前のことに注意が向かなくて

問2 ——線部①【 】できる」について、空らん【 】に入れるのに最も適切な言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. そろそろ
- イ. のろのろ
- ウ. じりじり
- エ. へらへら

問3 ——線部②「そう返事をしながら私は目をそらした」とありますが、この時の律の気持ちはどのようなのですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 麗ちゃんに親しく接してほしいと望んでいる。
- イ. 麗ちゃんと仲よくなりたいという思いがさめている。
- ウ. 麗ちゃんと同じように自分も好きな人を言わなければならないとあせっている。
- エ. 麗ちゃんに頼りにされるような力関係になりたいと思っている。

問4 ——線部③「よさそうな本」、④「そうだ、『くるみ割り人形』にしよう」とありますが、なぜ律は「くるみ割り人形」を「よさそうな本」と考えたのですか。次の文の空らん言葉に言葉を補って理由説明を完成させなさい。ただし、二十字以上三十字以内とします。

「くるみ割り人形」を読めば、

ことができると思ったから。

問5 ——線部⑤「私は靴かばんの中から本をとりだした。それを見て、今まで無表情だった塚本瀬里奈が急に顔をこわばらせ、後ろに一步下がった」とありますが、塚本瀬里奈にとって、「本」とはどのようなものですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. それ自体は綺麗きれいであっても、世の中の悪い面も見せつけてくるもの。
- イ. 読んでいると必ず息が苦しくなる、恐怖きょうふを感じさせるもの。
- ウ. 自分をその世界に引きずりこみ、戻もどって来られなくさせるもの。
- エ. 読んでいるときは楽しくても、読み終わった後にむなしさを感じさせるもの。

問6 ——線部⑥「私は塚本瀬里奈がまだ催眠術さいみんじゆつにかかっていることにぎよつとして、立ちすくんだ」とありますが、この時の律

の気持ちはどのようなようでしたか。その気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. クラスメイトと仲よくなってもらおうと思って行動したが、予想していた以上に効果があったことにうろたえている。
- イ. 世の中のおもしろさを意外にもすんなりと受け入れ、自分の心配をよそに楽しむ塚本瀬里奈にあきれかえっている。
- ウ. 塚本瀬里奈の様子がふだんとちがうことに気づいたクラスメイトから自分が不審ふしんに思われるのではないかと心配している。
- エ. 異様な状態のままの塚本瀬里奈を見て、自分がしたこと重大さを感じ、どうすればいいのかわからなくなっている。

(おわり)

国語解答用紙

教室番号

座席番号

受験番号

氏名

(注意) ※のらんには何も書かないこと

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
せる		
	⑦	③
	⑧	④

二

問 1

問 2

問 3

問 4
記号

漢字

問 5

問 6

三

問 1
A

問 2
B

問 3

問 4

問 5

問 6

※

※

※

※

※

※

※